

新聞一美先生退職記念小特集



新聞一美先生近影

平安朝文学の「白」の世界

新 間 一 美

一、大学教員としての三十五年

本日は、最終講義にご参集いただきありがとうございます。私は、昭和五十五年（一九八〇）に神戸の甲南大学の専任の講師として教員生活を始めて二十五年間勤めました。平成十七年（二〇〇五）にここ京都女子大学に移って十年になります。三十五年に亘る教員生活を送って来て、この三月をもって一区切り付けることになりました。今日はその最終講義となります。

講義は、学生があつて初めて成り立ちますから、今日の出席の方を含めて、今まで受講された数多くの学生の方々にまずお礼を申し上げます。また、同僚の先生方、職員の方々にも十年に亘ってお世話になりましたので、お礼を申し上げます。特に今年度は退任が予定されていましたので、本学における最後の学会活動ということで学会を三つも引き受けてしまいました。四月十九日の和歌文学会関西例会、五月十八日の和漢比較文学会国内

特別例会、十月十一・十二日の中古文学会秋季大会です。四月には大谷俊太先生に、十月には坂本信道先生、中前正志先生、大谷先生にお世話になり、いずれも盛会のうちに無事に終えることができました。院生、学生にもお手伝いいただきました。ありがとうございます。

さて、六十五歳にもなり、だんだん白髪も増えて来ました。この頃は予想外に眉も白くなりはじめまして、「眉雪」という京都大学に入学した四十五年ほど前に覚えた漢語を思い出しました。

幕末の漢詩人の藤井竹外が、桜で有名な奈良の南の吉野山で詠んだ「芳野懷古」という絶句があります。

古陵松柏吼天颺 古陵の松柏 天颺に吼ゆ

山寺尋春春寂寥 山寺春を尋ぬれば 春寂寥

眉雪老僧時輟帚 眉雪の老僧 時に帚くことを輟め

落花深処説南朝 落花深き処 南朝を説く

後醍醐天皇の御陵がある如意輪寺で詠んだ詩です。「落花」の中でほうきを持つ「眉雪の老僧」の「眉雪」という語が、眉が白くなって来た自分の身に関わってきました。「眉雪の老僧」ならぬ「眉雪の老教授」ですが、退任後は「教授」でもなくなるので、「眉雪の老博士」、「眉雪の老研究者」となりそうです。東京の高校で学び、大学に入る直前に初めて家族で吉野山を訪れましたので、この詩もその頃の思い出に繋がっています。

さて、本日は、平安朝の文人達はこの老いに関わる「白」ということを文学の主題として考えていたということを中心にお話ししたいと思います。題は「平安朝文学の「白」の世界」と読むことにします。

本題に入る前に、まず一通り今までの私の研究についてご紹介したいと思います。平安朝の文学、特に『源氏物語』を中心として、仮名文学における漢文学の受容を考えるとということが研究の中心です。

単著は、次の三冊があります。

『源氏物語と白居易の文学』和泉書院・平成十五年（二〇〇三）A

『平安朝文学と漢詩文』和泉書院・平成十五年（二〇〇三）B

『源氏物語の構想と漢詩文』和泉書院・平成二十一年（二〇〇九）

右の三冊以外に、最近唐代伝奇の『遊仙窟』関係の論文を多く書いておりますので、それを退任後に一冊にまとめて出版したいと思っています。

共著・共編著としては、次のようなものがあります。

『白居易研究講座』（共編・全七冊・勉誠社）

『田氏家集注』（小島憲之監修・共著・全三冊・和泉書院）

『新撰万葉集注釈』（共著・既刊二冊・和泉書院）

『田氏家集』は、菅原道真の若い頃の漢詩の先生で、岳父（妻の父親）でもあった島田忠臣（たなか）の漢詩集です。監修された故小島憲之先生は、大阪市立大学に勤めておられました。私は京都大学に非常勤講師として来ておられた先生の授業を受講し、先生の研究の方法を学んで今に至っています。

『新撰万葉集注釈』は、一応私が代表を務めている新撰万葉集研究会の編著で、まだ未刊分がありますので、退任後は完結を目指します。

主な論文は、最近数年間に書いたものを除いて、右に挙げた拙著に収められています。その中からいくつかご紹介いたします。昔から作品の始めと終わり、ということに関心がありました。論文についても研究生生活の初めの院生の頃書いたものと最近書いたものを取り上げます。

院生時代に初めて活字になったのが、『源氏物語』の始めの桐壺の巻に登場する桐壺の更衣に関する論文です。その頃は、ワープロ・パソコンがまだ普及する前ですので、本当の「活字」の論文でした。原稿はもちろん手書きです。

①「李夫人と桐壺巻」(『論集 日本文学・日本語 2 中古』阪倉篤義監修・角川書店・昭和五十二年(一九七七)) A 所収

二番目が、大学院の博士課程を出る時に書いた、『源氏物語』の最後の巻である夢の浮橋の巻の末尾についての論文です。

②「源氏物語の結末について―長恨歌と李夫人と―」(『国語国文』昭和五十四年(一九七九)三月) A 所収

この二本の論文は、どちらも白居易の「新楽府」中の「李夫人」詩や「長恨歌」に関わります。『源氏物語』の始めと終わりをまず論じ、中間についてはゆっくりと人生を掛けて研究しようと思っていました。

三番目に活字になったのは『古今和歌集』の序文についての論文でしたが、実は四番目の唐代伝奇の「任氏伝」と『源氏物語』との関わりを指摘した論文を大学院時代に先に書いていました。出版社の事情で出版がかなり遅れたのですが、おそらく私の論文としては一番知られているのではないのでしょうか。

③「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語―」(『源氏物語の人物と構造』笠間書院・昭和五十七年(一九八二)) A 所収

「任氏」はもともと妖狐で、絶世の美女に化けて男を魅了します。この論文は夕顔論ですが、今日の主題の「白」とも関係がありますので、あとで言及します。

『源氏物語』の構想論として、光源氏の生前部分を正篇、死後の部分を続篇として、一二に分ける考え方があります。三年ほど前にその正篇の最後に当たる幻の巻についての論文を書きました。

④ 「源氏物語正篇の終焉―幻卷と謝観「白賦」―」(『東アジア比較文化研究』十一号・平成二十四年(二〇一二)六月)

この論文で扱った晩唐の詩人謝観の「白賦」(「白の賦」)が平安朝では、かなり重要であると思っています。白尽くしの内容となっており、あとで詳しく紹介します。

最近では、平安朝以外の時代のものも少し書いています。芭蕉についての論もあります。

⑤ 「白居易・能因・芭蕉の「三月尽」―白河の関へ―」(『白居易研究年報』十五号・近刊⁽²⁾)

この論文がもうすぐ出版される一番新しい論文です。「白」字を含んだ「白河の関」を中心に執筆しました。『奥の細道』の旅で白河の関を越える時に、芭蕉に随行した曾良が、咲いていた白い卯の花を取り上げて、「卯の花をかざしに関の晴れ着かな」と詠んでいます。『奥の細道』には、「石山の石より白し秋の風」の句もあり、芭蕉も「白」に拘りがありました。

二、「白」と和歌

平安朝文学では、「白」がどのように表現されているでしょうか。「白」に関わる和歌三首を例として挙げましょう。平安朝中期の西暦千年頃に藤原公任(九六六〜一〇四二)によって編纂された『和漢朗詠集』は、上巻が四時部、下巻が雑部から構成されていますが、その雑部の最後が「白の部」となっています。その最後の作品、すなわち全体の終わりに白尽くしの次の歌が置かれています。

(1) しらしらしらけたるとし月かげに雪かきわけて梅の花折る

この歌は撰者の公任の作と言われています。『和漢朗詠集』の漢詩句には、白居易の句が多いのですが、この歌は、同

集の交友部所載の白居易の詩句「琴酒詩友皆拋我、雪月花時最憶君」（琴酒詩の友は皆我を抛つ、雪月花の時最も君を憶ふ）に用いられた「雪月花」をそれぞれ白いものとして詠み込み、それに白髪の自身の姿を加えています。⁽³⁾

二首目は、『小倉百人一首』に見える凡河内躬恒おほしうらのみつねの初霜と白菊の歌です。(1)よりは百年ほど前の歌で、もとは『古今和歌集』所載の歌です。

(2)心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花

(秋下・白菊の花を詠める 二二七七)

凡河内躬恒は、延喜五年（九〇五）に撰ばれた『古今和歌集』の四人の撰者の一人です。意味は、当て推量で折りましようか、初霜が置いてその白に紛れている白菊の花を、となりましよう。霜と花の白さについての解釈の例として、角川文庫版『百人一首』の島津忠夫氏の注釈を挙げましよう。旧版（初版昭和四十四年（一九六九））と新版（平成十一年（一九九九））がありますが、この部分については同じです（傍線、新間）。

石田吉貞氏が「定家は白の色にとくに艶を感じたのであるから、このむせかえるばかりの白の饗宴には、胸のときめきを感じたにちがいない」と言われていることは、いかにもと思われる。

島津氏は、石田吉貞氏の『百人一首評解』（有精堂・昭和三十一年（一九五六））を引用しています。石田氏の「むせかえるばかり」の「白の饗宴」という言葉は昔読んで、主観的な印象批評というように感じ、もう少し客観的な説明が必要だと思いました。島津氏の「新版」では、次のように漢詩との関わりについての言及もあります。

なお、新大系の脚注には、「菊を霜に見立てるのは漢詩に学んだ表現」として『白氏文集』の「満園花菊鬱金黃、中有『孤叢色似霜』をあげるが、片桐洋一氏は、『躬恒集』の「月影に色分きがたき白菊は折りても折らぬ心地こそすれ」という類似した発想の歌をあげ、「初霜の白さと菊の白さが見る者を惑わせる」という趣向は、躬恒独特

の機智であつて、漢詩の影響ではない」という（古今集全評釈）。

「新大系」は、小島憲之・新井栄蔵両先生校注の『新日本古典文学大系 古今和歌集』（岩波書店・平成元年（一九八九））を指します。校注者のお二人は私の大学院時代の先生ですし、その頃にこの本を執筆されていたということもあり、この注には関心があります。挙げられている白居易の作は、『白氏文集』巻十一「重陽席上賦・白菊」（二七七四）の句です。中に引用されている、白さが惑わせるという趣向は漢詩の影響ではない、という片桐氏の説にはあとで反論したいと思います。

三首目は、『源氏物語』の夕顔の巻の歌です。公任の(1)の少しあとぐらいの頃の作と思われる。

(3)心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

(夕顔・一二五)⁽⁴⁾

夕顔の君が、夕顔の花に関心を持った光源氏に、花を載せるようにと贈った扇に書いてあつた歌です。「心あてに」の言葉から(2)の躬恒の歌を意識して作られたことが分かります。白い「夕顔の花」に「白露」を配しているところは、「白菊の花」に白い「初霜」を配した躬恒の作に倣つたと考えられます。

三、白衣の美女―妖狐「任氏」と夕顔の君―

(3)の夕顔の巻の和歌では、白い「夕顔の花」が登場します。その歌を光源氏に贈った夕顔の君が狐の化身である絶世の美女「任氏」と関わりがあることを論じたのが、論文の③です。このことは修士論文執筆中に気づき、書き入れました。任氏は、伝菅原道真撰の『新撰万葉集』に登場します。この歌集は、万葉仮名で書かれた和歌に、それを翻訳したような七言絶句が付されているという特異な形式の歌集で、寛平五年（八九三）の序文が残っており、十二年

後に編纂される『古今和歌集』を理解するには重要な歌集です。この歌集については、小島憲之先生が大学院の演習の時に取り上げておられました。その延長で現在詳しい注釈を刊行中です。

秋の野遊を詠んだ上巻秋部の和歌の左の漢詩に「任氏」が登場します。

秋之野野草之袂歟花薄穗丹出手招袖砥見湯濫

(秋の野の草の袂たもとか花すすき穂に出て招く袖と見ゆらむ)

秋日遊人愛遠方 秋日遊人 遠方を愛す

逍遙野外見蘆芒 野外に逍遙して 蘆芒を見る

白花揺動似招袖 白き花揺れ動きて 招く袖に似たり

疑是鄭生任氏嬢 疑ふらくは 是れ鄭生が任氏の嬢をんな

歌は、秋の野を逍遙していると花薄（尾花）が揺れ動いて（美女が）招いているようだ、の意味ですが、詩の方では具体的に「鄭生」の「任氏」の名が出て来ます。唐代伝奇の「任氏伝」を読むと狐の化身である絶世の美女の任氏が白い衣を着て街で鄭生と出逢い、鄭生の愛人となるという話になっており、それを踏まえた詩です。尾花の「白い花」が女性の着物のたもとに見えるのは、任氏の「白衣」に理由があります。

「任氏伝」は、八世紀末に沈既済しんきせいによって書かれました。後の宋代には、白蛇の化身の美女を主人公とする「白蛇伝」が生まれますが、その前身の作品と言えましょう。任氏が白い衣を着ているのは、もともと白狐の物語であったからと推測できます。

その白い衣を着た任氏と主人公の鄭生（鄭子）との出逢いは、次のように描かれています。

偶値三婦人行於道中。中有白衣者、容色殊麗。鄭子見之驚悅。…白衣時々盼睐。意有所受。（偶たまたま三婦人の道中に

行くに値あふ。中に白衣の者有り。容色殊麗なり。鄭子之れを見て驚悦す。…白衣時より々に盼睐はんらいす。意に受くる所有り。〕
「盼睐」は、流し目で見ることです。鄭生は一目標れですが、任氏の方も鄭生に関心がありました。鄭生は任氏の家に連れて行かれ、その後、任氏は鄭生の愛人になります。

沈既濟よりやや後輩の白居易も任氏を詩に詠んでいます。十世紀前半にわが国で編纂された外来佳句撰の『千載佳句』（大江維時撰）に、白居易「任氏行」（別名「任氏怨歌行」）の逸文が四句二十八字分だけ残っています。「長恨歌」が西暦八〇六年に作られていますので、その頃の作でしょう。この作品は『千載佳句』にだけ残っていたと思われていたのですが、宋代の佳句撰の『錦繡万花谷』にも「任氏行」四句が残ることが、『全唐詩外編』（中華書局（一九八二））によって知られました。それが『千載佳句』にも残る白居易作の逸文であるという指摘がなかったため、そのことを指摘した論文を書きました。^⑤新出の四句を挙げましょう。

蘭膏新沐雲鬢滑　蘭膏新たに沐して　雲鬢滑らかなり

宝釵斜墜青糸髮　宝釵斜めに墜つ　青糸の髮

蟬鬢尚隨雲勢動　蟬鬢　尚なほ雲勢に随ひて動く

素衣猶帶月光來　素衣　猶なほ月光を帯びて来れり

「素衣」が白い衣で「任氏伝」の「白衣」に当たります。入浴して、髪を結い上げ、白い雲のもと、白い月の光を浴びて白い衣を着た美女の任氏が鄭生のもとにやってくるような場面だと思います。「雲」「素衣」「月光」などが白くしとなっており、縁語関係にあります。「任氏伝」よりもさらに白くしの女性として詩的に造型されています。

一方、夕顔の巻を見ますと、狐説話を背景としていることが、光源氏の夕顔の君に対しての次の言葉から分かります。

〔源氏「げに、いづれか狐なるらむな。ただはかられたまへかし」〕

(夕顔・一三九)

これは、あなたか私かのどちらかが狐なのでしょね。ただ騙されなさいよ、と言つて、夕顔を夕顔の宿からなにがしの院に連れだそうとするとするところです。

溯つて、夕顔と光源氏が出逢う場面では、「白」が強調されます。

白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる。…「隨身」「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる」…白き扇の、
いたうこがしたるを、「童」「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて、

(夕顔・一二二)

(夕顔・一二三)

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
十五夜の夕顔の宿、明け方にながしの院へ行く直前では、さらに白が強調されます。

(夕顔・一四〇)

八月十五夜、隈なき月影、…白妙の衣うつ砵の音も、
白き^{あはせ}袷、薄色のなよやかなるを重ねて、…いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、と
かくのたまふほど、にはかに雲がくられて、明けゆく空いとをかし。

(夕顔・一四三)

このように、夕顔の巻は白い夕顔の花に始まり、白い衣を着た夕顔の君の姿を中心に、白い扇に雲や月影を配し、
白尽くしとなっています。その描写の源泉として白尽くしの美女「任氏」を考える必要があります。

この白尽くしは、単独で出てくるのではなく、巻の並びから申しますと、続く若紫の巻は「紫」の色が取り上げられ、
その次の末摘花の巻は「くれなゐ」の色というように、色で巻が並んでいるということにもなっています。紫式部の
物語を書く上での工夫が感じられます。

四、青女―霜と雪の女神―

もう一つ『新撰万葉集』上巻の冬の部から「白」に関わる歌と詩を取り上げましょう。(2)の躬恒の初霜と白菊の歌と関わる、菊に霜が置くという歌です。

吾屋戸之菊之垣廬丹置霜之銷還店將逢砥曾思

(わが宿の菊の垣ほに置く霜の消えかへりても逢はむとぞ思ふ)

青女触来菊上霜

青女せいぢよ触れ来る 菊上の霜

寒風寒気蕊芬芳

寒風寒気 蕊すい芬芳たり

王弘趁到提樽酒

王弘おもしろ趁き到りて 樽酒ひつぽを提ぐ

終日遊邀陶氏莊

終日いっじつ遊邀す 陶氏が莊

歌は、菊の上に置く霜がすっかり消えてしまうように、死にそうに消沈してもあなたに逢おうと想っている、の意です。詩の中では、菊に置く霜と、九月九日の重陽節に客を迎えて酒を飲む陶淵明の姿が描かれています。太陰暦の九月は晩秋(季秋)ですが、ここは霜の歌、詩として冬の部に分類されています。

詩に見える「青女」は、霜や雪を司る女神で、今の雪女ゆきおんなに当たります。唐代の類書の『初学記』(霜)に『淮南子』を引いて、霜の神の青女について、「青女出以降霜」(青女出づるに降霜を以つてす)と記します。また、『淮南子』の高誘注を引いて「青女天神、主霜雪」(青女は天神にして、霜雪つかほを主る)と記しています。

「王弘」は、同じ『初学記』の九月九日部に引く『続晋陽秋』の記事中に登場します。陶淵明が九月九日に菊を摘んでいると「白衣の人」が来ます。それは、知り合いの王弘の使いで、酒を持って来て陶淵明に振る舞ったという話です。

『新撰万葉集』では、王弘自身が「樽酒」を持ってやって来たように詠まれています。

この『新撰万葉集』の歌や詩に関わる歌が『古今和歌集』に残っています。

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ恋しかりける

(恋・二・寛平御時后宮歌合の歌・紀友則〔五六四〕)

この歌は『新撰万葉集』歌の異伝で、一部が異なっています。

花見つつ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

(秋下・菊の花の下にて、人の、人待てる形をよめる・紀友則〔二七四〕)

この歌は、詞書から、菊の花のもとで人を待っている様子の人形が置かれている洲浜を詠んだものであることが分かります。人形は陶淵明に見立てられ、菊を見て王弘の白衣を着た使いを連想させているので、この菊は一般的な黄菊ではなく、白菊であることが分かります。『新撰万葉集』の詩の菊も白菊に霜が置いているさまを描いていると読めなくもありません。その場合は、白菊に白い霜が置き、白い衣の人物が取り合わされていることになり、躬恒の(2)の歌に近い状況です。

『和漢朗詠集』の撰者の藤原公任にも「青女」を詠んだ歌があります。

冬のはじめつかた、観音偈もとより久しう御読経にめされぬと聞こえたりければ

霜はやみうつろふ色は菊の花をとめの袖もかくこそは見め

かへし

をとめごが袖ふる霜のうちはへてたわまぬ菊の心とを知れ

(公任集〔四五〇〕〔四五二〕)

ある女性が「観音偈」を読経しなくなったと聞いて公任が贈った歌です。霜が置いて菊の花の色が変わったように、変わらなはずの「をとめ」（天女）の衣の袖の色も変わった、あなたの強く見えた心も変わってしまった、という冷やかしの意味でしょう。衣の色が変わったというのは、仏教で言う「天人五衰」を踏まえています。「五衰」の一つに天人の清らかな衣が穢れるというのがあります。

それに返した女の歌は、「をとめ」を「青女」に見なしています。青女が袖を振って一面に置いた霜であるけれども、その霜にもずつと弱ることのない菊の（強い）心であることを知りなさい、の意です。⁽⁶⁾

『和漢朗詠集』（冬部・霜（三六九））の紀長谷雄の詩序にもこの「青女」の姿が垣間見られます。紀長谷雄は、菅原道真の門人です。晩学だったので、道真と同じ年です。

聞寒夢驚、或添孤婦之砧上　　聞寒くしては夢驚く、或いは孤婦の砧の上に添ふ

山深感動、先侵四皓之鬢辺　　山深くしては感動く、先づ四皓の鬢の辺りを侵す

題に「青女司霜」（青女霜を司る）とあって、神秘的な青女が人間世界に霜をもたらさずさまを詠んでいます。（街の）奥深い寢室では、霜の寒さに眠っている人を起こさせ、一方で砧を打つ独り身の女性のもとに霜が置いています。砧の上には白い練（ねりぎぬ）が置かれているので、白い霜が白いねりぎぬに重なっています。深山では霜の寒さが山に住む者の思いを動かす、まず商山の四皓の白い鬢に白い霜が置く、の意です。「四皓」は、四人の白い者の意で、秦の始皇帝を避けて商山に籠もった白髪頭の四人の隠者を指します。

五、菅原道真の「白」——白梅と白菊——

躬恒の(2)の歌は、霜と白菊の取り合わせでしたが、少し前の菅原道真の詩に雪と白梅の取り合わせが見られます。

『菅家文草』の貞観十五年（八七三）の作を挙げましょう。宮中での正月の宴の詩で、清和天皇の命で列席の文人達が共に「春雪早梅に映ず」の題で詩を詠んでいます。

早春侍宴仁寿殿、同賦春雪映早梅、応製〔六六〕

早春に宴に仁寿殿に侍し、同じく「春雪早梅に映ず」といふことを賦す。製に応ず

雪片花顔時一般 雪片花顔 時に一般

上番梅榎待追飲 上番の梅榎 追飲を待つ

氷紉寸截軽粧混 氷紉寸きたきたに截りて 軽粧を混ぜず

玉屑添来軟色寛 玉屑添へ来りて 軟色ゆた寛かなり

鶏舌纒因風力散 鶏舌 纒むちかに風力に因りて散ず

鶴毛独向夕陽寒 鶴毛 独り夕陽に向かひて寒し

明王若可分真偽 明王 若し真偽を分つべくは

願使宮人子細看 願はくは 宮人きうじんをして子細に看しめよ

白梅の上に雪が降り、一様に見えて見分けがつかないさまを詠んでいます。その白い中で梅と判断できるのは、鶏舌香（丁字香）に似た香りが夕陽に冷たいことからです。「鶏舌」とあるので紅梅と解釈されて来ましたが、白梅でなければならぬに似た雪だけが夕陽に冷たいことからです。「鶏舌」とあるので紅梅と解釈されて来ましたが、白梅でなければならぬということをおつて指摘しました。⁽⁷⁾

最後の二句は、それほど判別がつきにくいので、明王は、もし真偽を分別しようと思うのなら、宮人（宮女の意）に子細に見させなさい、と結んでいます。

道真は、雪と梅との真偽を天皇に判断せよと提言しています。暗に「明王」（賢明な君主）であれよ、と天皇に提言し、自分がそのような提言ができる賢臣であることを主張していることになりました。

実は、「春雪映早梅」は、唐の尚書省の試験（省試）の題で、それをわが国では正月の宴の詩題として用いているのです。文人は力量を試されている面があるので、道真はそれに応えようとしています。

ここに見える、詩は君主が臣下の賢愚を見る手段であるという考え方は、和歌においても主張されていました。次に挙げる『古今和歌集』の二つの序文に記されています。

古への世々の帝、春の花の朝、秋の月の夜ことに侍ふ人々を召して、事につけつつ歌を奉らしめたまふ。…心こころころを見給ひて賢し、愚かなりと知ろし召しけむ。

（紀貫之・仮名序）

古天子、每良辰美景、詔侍臣預宴筵者、献和歌。君臣之情、由斯可見。賢愚之性、於是相分。所以隨民之欲、損士之才也。

古の天子、良辰美景ことに、侍臣に詔して、宴筵に預る者をして、和歌を献らしめたまふ。君臣の情、斯れに由りて見るべく、賢愚の性、是に於いて相分る。民の欲するところに随ひて、士の才を損ぶ所以なり。

（紀淑望・真名序）

「春雪早梅に映ず」の詩を詠んだ時、道真はまだ二十九歳です。晴れの場での作の中に政治上の主張を穏やかに籠めています。躬恒の(2)の歌が生まれる背景には、新大系が指摘するような白居易の霜と白菊の相似もあったでしょうが、道真詩が主張する、ものの真偽を判断すべきという雪と白梅の詩もあつたことを指摘したいと思います。

六、謝観「白の賦」と国文学

以上、ご紹介しましたように「白」の世界はさまざまですが、平安朝において最も影響があったのは、晩唐の詩人の謝観が作った「白賦」（白の賦）という作であると思います。これは、白に関わるものを列挙した作で、わが国の『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』だけに逸文が残っています。

① 暁入梁王之苑、雪滿群山。
暁、梁王之苑に入れば、雪群山に満てり。

夜登庾公之樓、月明千里。
夜、庾公の樓に登れば、月千里に明らかなり。

（和漢朗詠集・卷上・雪（三七四））

漢の梁王の兔園は、謝恵連の「雪の賦」（文選卷十三）で有名です。その兔園における雪の白さと、武昌の南樓における月影の白さを対にしています。南樓は、かつて東晉の庾亮が登って月を愛でたところです。

② 秦皇驚歎、燕丹之去日烏頭。
秦皇驚歎す、燕丹が去りし日の烏の頭。

漢帝傷嗟、蘇武之來時鶴髮。
漢帝傷嗟す、蘇武が来りし時の鶴の髪。

（和漢朗詠集・卷下・白（七九八））

秦の始皇帝は燕の太子の丹を人質として、もし烏の頭が白くなり、馬に角が生えたらお前を帰そうと言ったそうです。ある日烏の頭が白くなり、馬に角が生えて、始皇帝は驚きました。前漢の蘇武は、匈奴に囚われて十九年を過ごし、戻った。ある時、白い「帛」に自分はまだ生きていますということを書いて雁の足に結び付けました。それを武帝が見て、蘇武を召還すると蘇武の頭は真白でした。これが「雁信」の故事ですが、丹の故事と組み合わせ、隔句対にしています。

③ 寸陰景裏、將窺過隙之駒。
寸陰の景の裏に、將に隙を過ぐる駒を窺はむとす。

広陌塵中、欲認度関之馬。

広陌の塵の中に、関を度る馬を認めむとす。

(新撰朗詠集・卷下・白(七四五))

『莊子』では、人の一生を隙間を通り過ぎる白い駒(若い馬)に喩えます。この白い駒は、太陽の光を意味します。また、詭弁で有名な公孫竜が、白馬は馬ではない、という説をもつて関所を越えたという故事があります。陌は道路の意で、隙間を通り過ぎる白い駒と関所を通り過ぎる白い馬を対にしています。謝観は日の光と白い塵の中に白い馬の姿を認め、この二つの故事を対にしたのです。

この「白の賦」を用いた日本の作品を紹介します。

一条朝の文人の大江以言が九月尽の詩を作っています。太陰暦の九月は、秋の終わりの月なので、九月の終わりは秋の終わりです。九月尽の詩は、秋を惜しみ、秋を見送ることを内容とします。「秋未出詩境」(秋未だ詩境を出でず)の題で秋を擬人化した詩を作っています。

文峯案轡白駒景 文峯に轡を案ず 白駒の景

詞海艤舟紅葉声 詞海に舟を艤ふ 紅葉の声

(和漢朗詠集・卷上・九月尽(二七六))

秋は、馬に乗ったり、船に乗ったりして人間世界を去って行きます。文人はそれを見送るのですが、その最後の姿を描きます。詩を作る世界の峯(文峯)では、白い秋の光がくつばみを抑えてまだ留まっている、海(詞海)では、船を準備する音が風が立てる紅葉の声のように聞こえる、という意味です。

かなり以前に『源氏物語』の葵の巻の車争いの段に「白の賦」が使われているという論文を書きました。⁽⁸⁾

ものも見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがに、つらき人の御前わた

りの待たるるも、心弱しや。笹の隅にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。…大殿のは、しるければ、まめだちてわたりたまふ。御供の人々うちかしこまり、心ばへありつつわたるを、おし消たれたるありさま、こよなうおぼさる。

かげをのみみたらし川のつれなきに身の憂きほどぞいとど知らるる

と、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなければ、目もあやなる御さま、容貌の、いとどしう、出栄を見ざらましかばとおぼさる。…ほどほどにつけて、装束、人のありさま、いみじくととのへたりと見ゆるなかにも、上達部はいと異なるを、一所の御光にはおし消たれたためり。

(葵・七一)

牛車を並べた葵の上側の力で六条御息所側の二台の牛車は後ろに押し下げられてしまいました。御息所は、かろうじて牛車の隙間から騎馬の光源氏の姿を見ますが、その時に「身の憂きほど」をいよいよ知ることになります。「笹の隈」「かげ」は、『古今和歌集』の「笹の隈日の隈川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」（神遊びの歌（二〇八〇））を引いています。これは「日女」すなわち天照大神を詠んだ歌とされていますので、ここでは光源氏は光かがやく騎馬の神様のように描かれています。すなわち隙間を通り過ぎる光であり、「白の賦」の「寸陰の景の裏に、将に隙を過ぐる駒を窺はむとす」という状景と似てきます。「景」は以言の詩では、擬人化された騎馬の秋の光でした。

生きている光源氏の最後の姿を描く幻の巻では、「白」に関わる描写が多く現れます。この巻では、紫の上が亡くなった翌年の正月から年末までの光源氏の悲しみが順序立てて描かれます。その年末の描写を挙げましょう。

御仏名も、今年ばかりにこそは、とおぼせばにや、常よりもことに、錫杖の声々などあはれにおぼさる。…雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。導師のまかづるを、御前に召して、盃など、常の作法よりもさし分せたまひて、ことに禄など賜はす。…御覧じ馴れたる御導師の、頭はやうやう色変りてさぶらふも、あはれにおぼさる。

：梅の花の、わづかにけしきばみはじめてをかしきを、御遊びなどもありぬべけれど、なほ今年までは、ものの音もむせびぬべきこちしたまへば、時によりたるもの、うち誦じなどばかりせさせたまふ。まことや、導師の盃のついでに、

〔源氏〕春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてむ
御返し、

〔導師〕千代の春見るべき花と祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

：その日ぞ出でゐたまへる。御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふを、この古りぬる齡よはひの僧は、あいなう涙もとどめざりけり。：

〔源氏〕もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世もけふや尽きぬる

ついたちのほどのこと、常よりことなるべくと、おきてさせたまふ。親王みこたち大臣の御引出物、品々の祿どもなど、二なうおぼしまうけてとぞ。

(幻・一五二)

これが幻の巻の末尾で、すなわち正篇の終わりです。「仏名ぶつなま」は、一年の罪障を懺悔し払うために仏の名を唱える年未の行事です。雪が降り、白髪しろかみの導師が登場し、白梅の花が咲いて新年を迎えようとする中で光源氏の最後の「御光」が強調されます。この白尽くしの場ばが、『和漢朗詠集』の最後の白の部の内容と似ていると三木雅博氏が指摘されていますが、私もそれを認めて詳論しました。それが、冒頭で取り上げた論文の④です。この描写の背景に葵の巻と同じく「白の賦」を考えたのです。

その論文の中で、菅原道真の最晩年にも「白」を強調した「春雪」の作品があることに言及しました。ここでは、「白

菊」の詩をまず挙げます。道真は、延喜三年（九〇三）二月に没しますが、その五箇月前の延喜二年九月末に、「初霜」の後の、「雪」と見まごうばかりに白い「白菊」の詩を作っています。

秋晩題白菊

秋晩に白菊に題す〔五〇五〕

涼秋月尽早霜初

涼秋月尽く 早霜の初め

残菊白花雪不如

残菊の白き花 雪も如かず

老眼愁看何妄想

老眼愁へ看る 何の妄想ぞ

王弘酒使使留居

王弘が酒の使ひならば 便ち留めて居かまし

雪よりも白い「残菊」の「白き花」を見て、白い衣を着て陶淵明のもとを訪ねた王弘の使いの姿を「妄想」しています。『古今和歌集』の「花見つつ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける」と同想ですが、白菊を愛しながらも孤独の憂いの中に沈む道真の心が窺われます。

翌延喜三年正月に詠んだと思われる最後の詩は、大宰府の雪を白梅に見なして詠んでいます。さきほどの「白菊」詩の三箇月ほどのちの詩です。

謫居春雪

謫居の春雪〔五一四〕

盈城溢郭幾梅花

城に盈ち郭に溢れて 幾ばくの梅花ぞ

猶是風光早歲華

猶是れ 風光の歳華を早くす

雁足粘將疑繫帛

雁の足に粘り將つては 帛を繫けたるかと思ふ

烏頭点著思帰家

烏の頭に点著しては 家に帰らむことを思ふ

この辞世とも言える詩は一見絶句に見えますが、後聯は対句になっていることから律詩の前半と思われれます。白梅の

ような雪、雁の足に結ばれた帛のような雪、鳥の頭に付く雪を詠んでいます。この詩の後聯は「白の賦」の「秦皇驚歎す、燕丹が去りし日の鳥の頭。漢帝傷嗟す、蘇武が来りし時の鶴の髪」を用いています。¹⁰鳥の頭の雪は丹が自国の燕に帰ることができた機縁になっていますし、雁の足に付いた雪は、「雁信」の故事では蘇武が漢の都に帰る機縁となっています。道真は同じ故事を使っているのですが、白菊を見て王弘の酒の使いを思い出したのと同じく、雁の白い帛や白い鳥の頭は雪を見て妄想しているだけです。丹や蘇武のようにには都に帰れないことを前提にして詠んでいるところに道真の悲劇があると言えましよう。道真は、「白の賦」を用いて人生の最後の詩を白い雪を取り上げて詠んだのです。残念ながら武帝のようにには、醍醐天皇に道真の気持ちは伝わらなかったようです。翌月の二月二十五日に道真は大宰府で五十九歳の人生を終えました。

『和漢朗詠集』には白の部があつて、「白の賦」の一部や公任の作と言われる「しらしらし」の歌が配列されています。それが作品全体の最後に置かれているところに、公任の結局すべての最後は白であるという世界観が窺われます。『新撰朗詠集』もそれを踏襲しています。最後がなぜ「白の部」なのか、という議論が多くなされています。例えば、『平家物語』の冒頭の「沙羅双樹の花の色」で知られておりますように、釈迦の最期の涅槃（死）の時には、沙羅双樹など世界が白変します。また、道家の『荘子』では、「虚白」は悟りを意味する語で、それが「白の部」と関わるといふ説もあります。私としては、この「虚白」説とともに、「白の賦」の影響や、それを用いて作詩された道真の最後の詩の影響が大きいのではないかと考えています。光源氏の最後が白尽くしになっているのも道真詩や『和漢朗詠集』の「白の部」の影響があつたと考えます。

さまざまな平安朝の「白」の世界を紹介させていただきました。この講義の最後に、それでは、もし一言でまとめ

るとすれば、「白」とは何かということを考えましたのでそれをお話しします。

「白の賦」の「寸陰の景の裏に、將に隙を過ぐる駒を窺はむとす」というのは、『莊子』に基づくことはさきほど申し上げましたが、典拠は「知北遊篇」の「人生天地之間、若白駒之過隙、忽然而已」（人天地の間に生まるるは、白駒の隙を過ぐるが如し、忽然たるのみ）とあるところです。『莊子』の注の一つの唐の成玄英疏には「白駒は駿馬なり。亦日を言ふなり」とあって、「白駒」を太陽と見なしています。「白の賦」では、隙間を通り過ぎる一瞬の白い駒を詠んでいます。それは空をわたる太陽の光だと理解されており、人生の時間でもありました。「白」とは何か。一瞬の白い光は時間であり、短い人生そのものであるというのが今日の結論です。

これをもつて最終講義とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

注

- (1) 源順の「河原院賦（本朝文粹卷二）」に「向_レ誰_レ分_レ談_レ往事_一、一_レ兩_レ白_レ眉_レ僧_一とあります。竹外はそれを意識していたのかも知れません。
- (2) 平成二十七年三月に刊行されました。
- (3) この「しらしらし」歌は、月の光の中に白髪の老人がいて、花に向かっています。その点次に挙げる白居易「杪秋独夜」（三三八四）に想を得たと思います（白居易の詩番号は花房英樹氏の「綜合作品表」によります）。「無_レ限_レ少年_レ非_レ我_レ伴_一、可_レ憐_レ清_レ夜_レ与_レ誰_レ同_一。歡_レ娛_レ牢_レ落_レ中_レ心_レ少_一、親_レ故_レ凋_レ零_レ四_レ面_レ空_一。紅_レ葉_レ樹_レ飄_レ風_レ起_レ後_一、白_レ鬚_レ人_レ立_レ月_レ明_レ中_一。前_レ頭_レ更_レ有_レ蕭_レ條_レ物_一、老_レ菊_レ衰_レ蘭_レ三_レ面_レ叢_一。なお、第三聯（頸聯）は『千載佳句』（秋夜）に、第四聯（尾聯）は、『和漢朗詠集』（蘭）に摘句されており、有名な詩でした。
- (4) 『源氏物語』の引用は新潮日本古典集成により、巻名と頁数を記します。なお、引用の歌番号は『新編国歌大観』により、『菅家文章』『菅家後集』の作品番号は古典文学大系によります。

- (5) 拙稿「日中妖狐譚と源氏物語夕顔卷―任氏行逸文に関連して―」(『甲南大学紀要』文学編七十二・平成元年(一九八九)三月) A所収。
- (6) 拙稿「五節舞の起源譚と源氏物語―をとめぐが袖ふる山―」(『大谷女子大國文』二十八号、平成十年(一九九九)三月) B所収。
- (7) 拙稿「わが国における元白詩・劉白詩の受容」(『白居易研究講座 第四卷 日本における受容(散文篇)』勉誠社・平成六年(一九九四)) B所収。
- (8) 拙稿「源氏物語葵巻の神事表現について―かげをのみみたらし川―」(『甲南大学紀要』文学編九十九・平成八年(一九九六)三月) B所収。
- (9) 三木雅博氏『『和漢朗詠集』の部立「白」に関する考察―『和漢朗詠集』の構成ならびに周辺の文学を視野において―』(『源氏物語と漢文学』和漢比較文学叢書十二・汲古書院・平成五年(一九九三)、三木氏『和漢朗詠集とその享受』所収)。
- (10) 川口久雄氏が『菅家文章 菅家後集』(日本古典文学大系)の中で指摘されています。
- (11) 菅野禮行氏が主張されています。同氏『和漢朗詠集』(小学館・平成十一年(一九九九))の解説参照。道真における「虚白」については、拙稿「白居易の諷諭詩と菅原道真―新樂府「牡丹芳」詩・「白牡丹」詩の受容を中心に―」(『白居易研究年報』十二号・平成二十四年(二〇一〇)十二月)参照。

〔附記〕本稿は、平成二十七年一月二十日(火)四講時に京都女子大学J校舎J202教室で行なわれた最終講義に基
づきます。内容については、一部加筆しました。当日は、卒業生、院生、学生の諸姉等から花束、記念品をい
ただきました。また、夕方より懇親会も設定していただきました。感謝申し上げます。

(元本学文学部教授)